

18

未 満

二次元ドリームノバルス

元女騎士は 新人ヌパイ

先輩エルフと挑むオークの監禁人ミッション

木森山水道

挿絵：風丘

試し読み版

CHARACTERS

登場人物紹介

コハク

KOHAKU

悪徳上司を殴ってしまい騎士職をクビにされた正義感の強い女性。
世のため人のためになる職に就くため、スパイ採用試験を受ける。

クリスタル

CRYSTAL

コハクの先輩エルフスパイ。エルフとは思えぬ豊満なエロボディの持ち主。どうやら人妻のようだが……？

リトル

LITTLE

クリスタルに長年連れ添っている小動物。

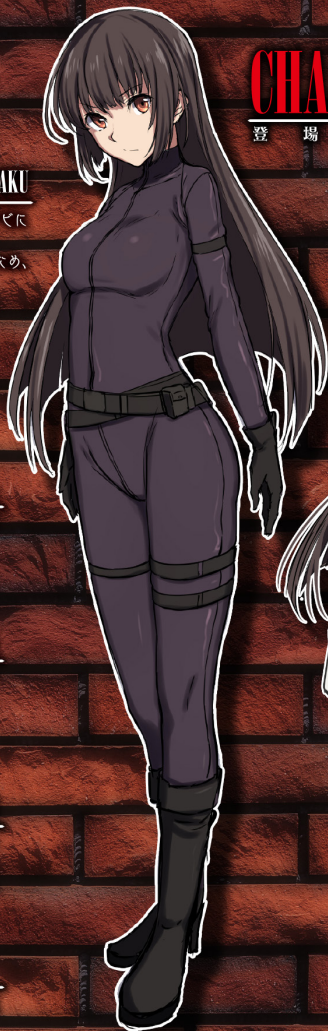
ワルデス

WALDES

コハクが騎士職をやめる原因となった元上司。
裏社会とのつながりが噂されている。
性彙。

ブヒー

オークの悪徳豪商。違法な性具を売りさばき悪もうけをしている。
オーク族らしくその性欲は計り知れない。



CONTENTS

目次

report1
スパイ志望は正義の失業女騎士 004

report2
処女喪失！
殴った中年元上司との偽装売春 019

report3
潜入開始！
豪商オークのワイセツ身体検査 085

report4
Wで奉仕！
目眩ましの淫乱ハニートラップ 162

report5
絶体絶命！
悪党どもより劣情をこめて 261

report6
愛欲スパイ 382



report 1 スパイ志望は正義の失業女騎士

K王国の城下町。昔ながらの商店街が目覚めだした早い時間。大通りに面した小さな本屋で、彼女は立ち読みを始めた。

「なんてことなの、無職になってしまったわ。新しい仕事を見つけないと」
店先のラックから無料の就職情報誌を取り、一心不乱に読みふける。

年の頃は二十歳ほど。紺のスーツと黒いヒールという地味なりクルート姿が、凛として生真面目そうな印象を強めている。

髪はくすみなど無縁の純黒。額にかかる前髪だけでなく、もみあげの延長の後れ毛も、腰まで届く後ろ髪も几帳面に揃えられていた。目尻がキリリと上がっていて、薄い桃色の口元を引き締めている様子といい、常在戦場と言わんばかりの雰囲気醸し出している。

一方、身体は小柄だった。身長百五十五センチ。同年代の女性と比べると少し低い方で、おまけにバストもだいぶ控えめ。スーツの胸元は申し訳程度にしか膨らんでおらず、まるで思春期の少女のよう。もつとも、ウエストはかなり細く、タイトスカートのヒップはなかなか充実しているので、スタイルが悪いということではなく、むしろいい方と言えた。

「よお、クビ騎士女」

店の奥から本屋の店主が顔を出す。顔に深い皺を刻み、背中を丸めた小さな老人だが、声にハリがある。見た目よりも元気な男だった。彼は毒舌とは裏腹に、気さくな顔で続ける。

「聞いたぜ。上司を殴って、騎士をクビになったんだってな。それで就職情報誌かい」

「あ、おじさん」

気まずい顔をする彼女。店主は昔なじみ。生まれ育った界限だけに、赤ん坊の頃から知られている。それだけに、失職と立ち読みの恥ずかしさはひとしおだ。

「そんな顔すんなよ。ロハ無料の雑誌なんだ。立ち読みなんて、いくらでもしな。むしろ、お前さんみたいな美人がいてくれたら、野郎どもがふらふら〜と寄りついて、うっかり買い物までしちまって、商売繁盛ってなもんさ」

店主の頬が僅わずかに緩む。

「上司を殴った件だって、事情はよくわからんが、俺に限らず他の奴らも、胸がスツとしてる。あの野郎ときたら金持ちや、いやらしい企業の肩を持ち、貧乏人をいじめてた、ろくでなしだからな」

「そう言ってもらえるとありがたいわ。それにしても、昨日のことだというのに、もう話

が伝わってる」

「既に街中に広がってるぜ。もつとも、お前さんの悪口だが。清廉潔白な騎士にわけもなく暴力をふるった乱心女騎士、てな具合よ。ふたりの正体を知ってる連中は、鵜呑みにしてないけどな」

「わたしは本当なら、傷害罪の犯罪者。でもあの筋肉中年は、人事権のある部署のご同類を使って、クビにしかただけ。後ろ暗いところがあるものだから、調べを進められるのを嫌い、誤魔化したのね。可能な限り都合の悪いことを握りつぶした上で、流言で復讐するつもりなのよ。悪い噂を流して街にいられなくしたり、再就職できないようにしたりするのが狙いだわ」

「しかし、お前さんはただの元女騎士じゃない。国の剣術トーナメントに出れば、最後の方まで残る強者。護衛の類いの仕事なら、引く手あまたじゃないのかね」

彼女はかぶりを振る。

「そういうのは最後の道ね」

「あん？」

「わたしは、父さんみたいに世のため人のためになる仕事をしたいの。護衛だってそうだけれど、できればもっと広く社会の、大勢の人のためになりたいわ」

「あの親父にしてこの子ありか。剣の腕が達人なことといい、親父そっくりになったもんだぜ。もつとも、あの無骨な男とは似ても似つかぬ美人だがな……で、お眼鏡にかなう仕事はあったかよ」

彼女の手元の就職情報誌に視線をやる。本人は肩をすくめた。

「これというのはなかなかないわ……できれば王国の機関で働きたいけど、例の噂のことがあるし、そこまで念を入れてる筋肉元上司なら広く手を回してるだろうし……あいつつたら、方々にパイプを持っていて、妙に影響力があるのよね……」

嘆息する彼女。そのときだった。

「いたいた。こんにちは。上司を殴ってクビになったんですって？」

太い中年声が割って入った。

「こんにちは、レッドさん。あなたの耳にも入ったのね」

彼女は見上げて挨拶する。やってきたのは、オーガ種族だった。二メートル半はあるガツシリした巨軀きよくを古ぼけたローブで覆っている。不思議と悪臭はしないものの、洗濯をせずに何年も使い続けたみたいにボロボロの衣服を着ている割には、礼儀正しくフードを取る。現れたのは、焼けたように真っ赤な肌の野獣顔。鳥の巣みたいにもじゃもじゃの黒髪。一対の黄色い角は、天を貫かんばかりにそそり立っている。

気の弱い者が見たら腰を抜かす風貌だが、根が優しくて親切なのは、周囲の住人は皆知っていた。重い荷物を持ってもらった者、遊んでもらっている子供、馬車の営業が終わった夜中に医者に抱えていってもらった急病人は少なくなく、そんな活躍が知れ渡っている。人間種族と彼のような魔物種族の共存共栄は、三百年ほど前から始まったこと。人間の国、魔物の国などという違いは現在もあるものの、異種族間の交流は進んでおり、双方の領土で別の種族を見る機会は少なくないのだ。

「酷い言われようですよ。ただでさえ、ゴシップは市民の大好物。美人女騎士の醜聞とくれば、飛びつかないわけがない。人の噂も七十五日と言いますが、しばらくは好奇の目で見られるでしょう。それだけならまだしも、相手が悪人と思ったら、正義の味方になったつもりで、物を投げつけたり、闇夜に紛れて襲いかかったりする人もいるご時世ですし」

彼女はため息をつく。

「まいったわ……暴力沙汰ならいくらでもいなせる自信はあるけど、再就職にも影響しそうなのはねえ……こうなったらダメ元で、あの男の不正を告発して、名誉回復を図るしかないかも……殴ったことは悪いけど、情状酌量してもらおう余地はあるはずだし……」

お腹に手を当てて視線を落とす。

「余分なお金は恵まれない人に寄付してたから、七十五日も暮らすお金なんてないわ……」

煩わしいことから一旦離れて希望を妥協し、護衛の仕事で食べていく手もあるけれど……」

「あの……そこで私の用事であり、ご提案なのですが……」

オーガは懐ふところに手を伸ばした。冊子を取り出す。尖った爪の指先を不便そうに使ってページを繰った。腕を伸ばして腰を屈め、その部分を見せる。

「ちよつと、ここを見てくださいますか」

「なになに……これも無料の就職情報誌なのね……ええと……K王国中央秘密情報局？

……これって、王国諜報機関員募集のお知らせじゃないの」

「はい。いわゆる、王立スパイ組織の求人です」

ふたりはページを見ながら言い合う。

「へえ、こういうのも就職情報誌に載ってるんだ。知らなかった。わたしが立ち読みしていたのは最新号だけけれど、なかったわ」

「大きなごたごたのない時代になり、人口が増え、それに伴い、小さいごたごたが増えてきたことから、人員募集を年々広くしているのだとか。ご覧いただいているのは、市中に出回っていない最新号で、その後に出るものなんです」

「どうしてそんなものを持っているのよ」

顔を上げて訊ねると、彼は目を見て説明してくれた。

「この職に相応しい人にお渡しする仕事をしていました」

「ふうん。あなたって、そういう紹介業をしていたの。初めて知ったわ。なんの仕事をしているかなんて気にしたことがないものだから」

「正社員じゃなく、アルバイトですがね。色々なアルバイトをして、貧乏しながら気楽に食いつないでいます……そんなことより、どうです？ この仕事。危険が付きものの割にお給料が安いのはなんですが」

彼女は腕組みして考える。

「うーん……スパイかあ……務まるか自信はないけれど、世のため人のためになる仕事をしたという希望には合うわね。わたしにとっては、お給料の額より、そっちの方が重要よ……元上司の手が回っていてダメになるかもしれないけれど、チャンスがあるならやってみようかしら。わざわざ紹介してもらったのだし」

「他のお仕事よりも命がけになると思いますが、身も心もタフなあなたなら大丈夫ですよ。そうと決まれば、善は急げ。誌面の日取りではなく、今日の午後面接ができるよう、当局に連絡しておきます。ご都合はどうでしょう」

「無職で暇なもの。もちろんいいわ」

「では、詳しい場所と時間は……」

彼女はしつかり頭に刻んだ。オーガや店主に挨拶をして別れ、自宅に戻って身なりを整え、面接に備えて早めの昼食を済ませると、また出かける。道中、後ろ指を指されたりひそひそ話をされたりしたが、気にせず目的の場所へ向かった。

「誰もいないわね」

面接場所は郊外の公園。東の出入り口から数えて三つ目の石のベンチだった。

「時間の二十分前だから仕方ないか」

腰掛けながらひとりごちる。利用者はまばらで、見渡す範囲には数人しかいない。公園といっても、芝生の空き地といったもので、設備は複数のベンチとあずまや位。

「こんなところで面接するなんて変わっているけれど、諜報員がこういう場所でさりげなく情報の受け渡しをすると、聞いたことがあるわ。そういうものなのでしょうね」

それとなく周囲を見ながら待つ。諜報員など話に聞いただけで見たことがない。一体、どんな人が面接官なのかと興味が湧いて、あの人なのか、この人なのか、などと考える。「離れたベンチでくつろいでるご老人。木剣の素振りをしている男の子。赤ん坊をカートに乗せてお喋りしている主婦グループ……皆それっぽくないけれど、お仕事がお仕事ですもの。それっぽい諜報員なんていないわよね」

男か女か。老人か中年か若者か。すれちがってもなんとも思わないような一般人風の者

が来るのか。反対に、苦み走った顔にもものしい格好の者が来るのか。考えると、好奇心でわくわくしてきた。気楽に構えていいときでないのはわかっているのだが、自然に頬が紅潮する。

そのときだった。

「ごきげんよう。組織への就職を希望してください、本当にありがとうございます」

不意に聞こえた上品で色っぽい声は、最後に自分の名前を呼んだ。それでハッとする。

「え！ ……いつの間に」

ベンチの反対側に女が座っていた。今まで絶対に誰もいなかったと断言できるのに加え、近くに來たら見逃しようがないという位の美人であったので、飛び上がりかけた。

騎士時代、城のパーティーの警護をし、着飾った貴婦人を何人も見た。その中に紛れ込んでも、彼女の魅力は色あせないだろう。ただ、謎の美人は人間ではなかった。エルフ種族だ。

横に長いとんがり耳を除けば人間そっくり。美形が多く、森を故郷とする出自から、【森の貴族】などと呼ばれている。

ご多分に漏れず、たおやかで凜とした面差しだった。涼しげな切れ長の目、高く整った鼻、ぼってりした唇。口紅をしていなくても赤いそこは、透き通るように白い肌とのコン

トラストで、同性でも見ほれてしまう色気を放っている。エルフ種族は長寿で、しかも若い期間が長い。外見から年齢を察するのは難しいが、人間ならば二十代半ばという顔貌だった。

もつとも、肢体は女盛りの三十代後半の熟れぶりである。彼女は、グレーの地に白いストライプが入ったスーツを着ている。座っていてもわかるほどの長身。百七十センチはありそうで、自分よりも頭ひとつ分は高い。

胸元は、長身に見合うほど豊かだった。ほっそりした脇腹のラインを軽々飛び越え、触れたら弾けてしまいそうな位に張り詰めている。無骨な椅子のベンチでむにゅりと潰れているタイトスカートのヒップにしても、負けないポリウムに見えた。しなやかな手足は、びっちりしたアンダーウェアを纏まとっている。夜の闇を彷彿とさせる漆黒だけに、美しく白い肌との相性は抜群。ブラウスやパンティティストッキングでないのは奇妙だし、スーツというストイックな出で立ちであるが、だからこそ艶めかしさが際立っている。

「驚かせてごめんなさい。方便でしたの。わたくしが組織の者だということを、手早く信じていただくための」

「それじゃ……あなたが、わたしの面接官？」

「クリスタルと申します」

慇懃に話す女だが、視線は胸元へ落としていた。豊かなそこに持つてきた手の中で、ネズミなんだかりスなんだかよくわからないが、なんとも愛らしい小動物を遊ばせている。端から見たら、気晴らしに公園に来て小動物にじゃれつかれているキャリアウーマンというところだろう。

「うわぁ。外見だけじゃなく、名前も綺麗……世の中には、こんなできすぎたことつてあるのね」

常識で考えれば失礼な態度だが、相手はスパイ組織の女。そういう習慣なのかもしれない。気にもとめず、相手と小動物をしばし眺めた。可愛い動物と美人の組み合わせは、ずっと見ていたくなるほど絵になっている。

「外見はともかく、名前は偽名ですわ」

「え？」

「諜報機関……スパイの女ですもの。スパイは息をするように嘘をつくものでしてよ」
エルフは淡々と続ける。

「あなたのことは、お名前以外のことも存じております」

「うわぁ、スパイと会話してるって感じだわ」

彼女の目が子供のよう輝く。

「こちらとしては、是非ありません。明日からでも、働いて欲しい位ですの」
「ほんとですか！」

嬉しくて大声が出た。だが、すぐに立場を思い出した。おずおず確認する。

「でもわたし……騎士のくせに上司を殴ってクビになったんです……昨日のことなのですけど……ご存じですか？」

エルフの態度は変わらなかつた。相変わらず事務的に答える。

「その点も含めてあなたのことを存じており、また採用したい所存ですよ」

「ありがとうございます！」

無職の女は飛び跳ねて喜ぶ。だが、そう思い通りにはいかなかつた。エルフが無表情で切り出す。

「ただ……」

「え？」

雲行きが怪しくなってきた気がして警戒しながら、エルフの言葉を聞く。

「群を抜く剣術の腕前、誠実な人柄、お金よりも献身の精神を優先させる性格……貴重な人材だと思っておりますけれど、だからこそ、疑問点もございませぬの」

「疑問点？」

精液が溜まったところを見ながら、満足そうにため息をつく。

「はあ……ようやく終わったわ……」

彼女は安堵のため息をつく。しかし。

「バカ言え。ここからが本番だ」

「え！」

彼は面倒くさそうに上半身の服を脱ぐ。上着からなにかの小瓶を取り出すと、手淫のときから履いているブーツだけの全裸になった。身長二メートルの鍛え上げられた全身は、下半身に負けない位に逞しい。浅黒く日焼けした肌は、どこもかしこもはち切れんばかりだ。性根が腐っているのに目をつむれば、体格と筋肉を発達させる才能は抜群なのだと素直に賞賛できる。そんな男らしい肉体美を体現していた。

「一回目の射精など、オレにとつては準備運動も同然だな。見ろ。オレのデカチンポはどんな様子だ」

「……勃起したまままだわ……いえ、さらに元気になつてみたい……！」

熱く硬化している様子といい、腰に手を当ててふんぞり返る彼の中心で根元からビクンビクンいつている様子といい、そうとしか思えない。

「さつきも少し言ったが、一度勃起したら、気の済むまで射精しないと収まらん。オレは

まだ、やめる気はない」

どう猛な気配をまき散らしながら、一步、また一步と近づいてくる。

「うっ……」

欲深く発情した牡に気圧されて、彼女は後ろに下がる。だが、ここは袋小路。突き当たりを背にしていたのだ。Vの字に走る真っ赤なスリングショートの背中は、ほどなく冷たい壁に阻まれた。もう、逃げられない。

「観念するんだな。抵抗しても、終わるのが遅くなるだけだ」

「くっ……す、好きにしなさいよ……わたしは逃げない……後ろに下がったのは、少し驚いただけなんだから」

色々な理由で逃げられないのは忘れていない。またもや覚悟を決めて相手を見返す。

「いい心がけだ。安心しろ。オレは上手い。不必要に辛い思いはさせないぞ。辛いということは女体がほぐれていない証拠。ほぐれていない女体をやって、チンポは気持ちよくならないからな」

その場でしゃがみこむ。彼女の秘部と視線を合わせながら、持っていた小瓶の蓋を開ける。口を傾けた。詰められていたのは、かなり粘度の高い液体らしい。細かい気泡をたくさん含んでいるそれを指先に垂らす。同時に反対の手の指を二本使い、水着を横にずらし

ながら秘部を広げる。

「な、なにをするの……?」

「潤滑油を塗る。膣をほぐす働きもある、マジックアイテムのローションでな。チンポが太いことで知られる【オーク種族】が、身体もマンコも小さいことで有名な【ドワーフ種族】とやるときによく使われる。その名も【オーク無双】。その筋ではロングセラード」

「うう……ひやつとしてる……」

ごつごつしていて長い指が、遠慮なく膣に入ってくる。やり方に乱暴なところはない。厳つい外見からは想像できないほど、丁寧かつ精密に膣の横皺を伸ばしては、奥の奥までしっかりと塗り込んでいる。

「まって……オークがドワーフとやる……つまり、セックスするときに使う物をわたしの……膣に塗っているという事は……」

「そうだ。ここにオレのデカチンポを突っ込む。お前の処女をもらい受けるということだ」
「そんな!」

血の気が引いた。さっきの擬似的なプレイとは違い、こんな男と本当にセックスするなんて。これまでのことを考えれば、締めはきつと膣内射精。本当に孕まされるかもしれない。最悪ではないか。

「いやっ」

拒絶の意思と力を込め、勢いよく太ももを閉じる。

「おっと。流石に、そうくるか。だが、予想済みだ。さつきも言ったが、オレは経験豊富。バージンのこんな反応も経験済み。いくらでも対応できる」

全体に粘液を纏った彼の指先が、額を弾くいわゆるデコピンの要領で、無防備なクリトリスを弾いた。

「きゃあっ！」

強烈な衝撃が脳天を突き抜け、下半身から力が抜けた。開いて膝から崩れ落ちる寸前、彼の丸太のような二の腕が、お腹の辺りを壁に押しつける。壁と腕にサンドイッチされている形で、彼女は無理矢理立たされた。

「はあ……はあ……なんなの、今の……あんなすごい衝撃は初めて……」

「クリトリスを弾いた。敏感なところだから、乱暴に扱えばこの通り。抵抗の気力もごっそりなくなつたろう？ 準備が終わるまで、大人しくしててもらおう」

「うう……ほんとにあんたは最低だわ」

思い切り罵つたつもりだったが、声は弱々しい。言われたように、心からも身体からも、抵抗する力がなくなっているのだ。

筋肉中年は作業再開。身動きのとれない女の秘部に、潤滑油を塗り込んでいく。ほどなく、空になった小瓶を放り捨てた。

「中央に穴が空いたような処女膜の向こうもヌレヌレにしてやった。これで準備完了。さあ、インサートの時間だ」

「よ、よしなさいっ」

逃れようともがく。まだ力が抜けているので、ウエストをよじらせるので精一杯だが、必死に行く。

「観念しろ。男の……しかも、このオレの筋肉から逃れられるものか」

太く鍛え上げた両手で、瑞々しいお尻をがっしり掴む。絶対に逃がさないという意味の籠もった拘束で、身じろぎもできなくなる。

「やめてよ……そんな大きいもの、入るわけがないじゃない」

「つべこべ言わずに力を抜け。抵抗しても、苦しくなるだけだぞ」

嫌がる彼女を、優越感たっぷりにせせら笑い、両脚を広げ、膝を落とす。一五五センチの小柄な女を二メートルの男が立ったまま——いわゆる対面立位で交わろうというのだから、彼はかなりのガニ股になっていた。その状態で腰の位置を調整。精液の残滓ざんしでぬるつく剛直の先端を、びたりと当てる。

「うう……熱い……それに硬い……これがペニス……こんなものが、これからわたしの中に入るの……？」

釣り上げられた魚の心地で、デカチンと言わされた性器を見る。潤滑油で全体的に濡れている大陰唇と密着し、今にも押し入ってきそうな男根は、やはり太くて大きい。先端だけでも、肉付きが薄くて平たい大陰唇を半分以上も覆うサイズなのだ。全部入るとはとても思えない。

「入るとも。それを今から証明してやる」

「無理よ、壊れちゃう……いやっ……ああ……あああああッ」
にゆる……にゆるる……ぬぷぷぷ。

筋肉中年の剛直が、バージンの狭い腔にゆっくり入り入ってくる。驚ぶかみにしているお尻を手前に引きながら、腰を突き出している格好だった。

「うああ、やだ……ほんとに入ってくる……はあ……はあ」

息が止まりそうな位に胸が詰まる。体内に侵入してくる巨根の異物感は強烈で、存在感を強く意識させられた。

「見た目よりもずつと熱い……それに硬い……わたしの中を自分の形に引き伸ばしてる……張り出したカリで、ごりごり削ってる……うあ……うあああああッ」

まるで熱した鉄の棒でも突っ込まれている気分だった。しかし、金属ではなく肉を埋め込まれているからだろう。感触は鮮烈だが、どこか親しみを感じる。本当に鉄の棒を突っ込まれるのに比べれば、まだマシに思えた。

「お、この抵抗感。処女膜だな？ いただくぞ、ふんっ」

「え、ちよつと……あつ、あああッ」

身体の中心が突き破られていくような不吉な圧迫感が急激に高まる。

ブチッ！

「あああああああ~~~~~~~~!!」

筋肉中年の巨根は、あっけなく処女膜を破った。最低のロストバージンを迎えた股間が、痛みと汚辱で弱く震える。

「う、ううう……痛い……こんな奴に奪われたと思うと気持ちが悪いし……こんな最低な激痛は初めてだわ……」

剣を持って男など一蹴する元女騎士が、頬に大粒の涙の筋を作る。

「痛い思いをさせないと言っておきながら、すまなかつたな。しかし、これは、女ならば誰もが通る道。人生において最初で最後の特別な痛み……」

挿入を深めながら機嫌よく笑う。



「がははは。それを与えられて爽快だ。この先、たとえ誰かと結婚しようとも、こればかりはやり直せない。そんな特別の存在になれて嬉しく思うぞ。生意気な女の大事なものを、踏みにじってやったというゲスな優越感だな」

直後、亀頭の先が子宮口に当たると。

「お、奥まで着いたぞ。このコリコリという感触は子宮口に違いない。乳房が貧しい外見通り、膣が短いな。オレのデカチンポは、三分の一以上残っている。だが、これはこれでいい。この女を圧倒してる感じがするからな」

「うくっ……そんな……とうとう奥まで入れられたなんて……」

少しも好きになれない男に手ひどく汚された意識で、新しい涙がこぼれてしまう。

「ショックのようだな。しかし、オレは嬉しい。マンコの具合はすこぶるいいぞ。まるで、大嫌いなオレを追い出そうとしている風な、新品で狭い媚肉の締め方。見た目とは裏腹に屈強な元女騎士だからこそ、強烈さもある。バージンらしい粘膜の生硬な具合も、これはこれで気持ちがいい。処女を奪った実感を強めてくれる」

筋肉中年はゆっくり腰を振り始める。

「ふんっ……ふんっ……じっくり味わわせてもらおうぞ……ふんっ……ふんっ」

大きな手のひらからもはみ出すお尻を握り直し、絶対に逃がしはしないという雰囲気

醸し出しながら、男を知らなかった女壺を擦り上げる。

「う……うあ……う、動いてる……何回も出たり入ったりしてる……」

カリ首の張り出した熱い勃起と膣内のゆっくりとした擦過感に、彼女が脂汗をかく。

「そうだ。何回も出たり入ったりしてるぞ。上質のローションでたっぷり濡らしていたから、滑りはすこぶるいい。お陰で、抜き差しはスムーズ。痛みや不快感はなく、快樂だけを味わえる」

「自分の快樂のためだけに女を利用するなんて、とことんサイテーだわ……！」

ローションのお陰だろう。とても入るとは思えなかった巨根に、体内から食い破られかけているような不吉な膨満感はいぶ和らいでいる。破瓜の痛みも同じだ。クリトリスをこっぴどく刺激された痛苦はなくなっていた。しかし、だからといって、性根の腐った男と性交している事実は揺るがない。それが精神的に苦痛なのだ。

買われた娼婦を装っているのを忘れていないが、嫌悪感はとでも隠せず、自然に筋肉中年を睨んでしまう。彼は暗く笑う。

「せいぜい悪態をつくがいい。それは、心の折れていない生意気な女を追い込んでいる実感を強め、肉の快樂を何倍にもしてくれるスパイスなのだ……おっ、そろそろ出すぞ」

筋肉中年の巨根が、膣内でビクビク震え始めた。

「出すって……まさか……！」

「そうだ。精液だ。さっきは地面に無駄撃ちしたが、今度はお前の中で放つ。先端を子宮口にぴったりつけ、思い切り出す」

「ちよつと、やめてよ！ わたしを妊娠させたいの！」

ツバを飛ばして抗議する彼女に、悪徳騎士は冷たく答えた。

「別に。お前に自分の子供を産ませたいだなんて、思っていない」

「だったらどうして！」

「こんな状況では、男という生き物は生殖本能に駆り立てられる。逆らうのは苦痛だが、従うのは目眩く快樂でな。それに、オレを殴った身の程知らずにして、剣を持てば一流である正義気取りの女騎士への仕返しとして、大事な卵子へ精子を送り込むのは痛快だ」

悪漢の怒張は勢いよく暴れる。膣全体を揺すぶりながら、精液を吐きたそうに時々突っ張る。

「お前にとって、こんな完全敗北があるか？ もしも孕んだら、卵子すらも敗北させた気分になれる。お前にしてみれば、究極の完全敗北というわけだ」

「なんて奴なの！ 自分の快樂のためだけに、女をオモチャにしたり、種の存続のために子供を儲けるといふ神聖な行為すら冒涇したりするなんて！ どこまでサイテー……いえ、

鬼畜なのよ！」

「その鬼畜の精子を受け取るがいい。まだバージンらしさの抜けないピュアなマンコを、オレの種汁で溺れさせてやる……ふおおおおおっ！」

巨根が一気に膨れあがった。彼の抜き差しの速度が上がる。先端が子宮口に当たるときは軽くノックする程度に調節しているものの、まだまだ生硬な膣粘膜は高いカリ首で存分に抉る。

「うっ……い、いやあ……こんな男の精液なんて出されたくない……妊娠したくないっ」力を振り絞って逃れようとするが、その前に抱きすくめられてしまった。

「無駄だ。オレの筋肉からは逃れられない」

中年は肉の壁と言いたくなる巨軀の全体を使う。彼女の前半身に肉体をぐいぐい押しつけ、壁を利用しサンドイッチに。男らしい両腕は、細い背中に回して抱きしめる。二メートルの自分が、百五十五センチの小柄な彼女と股間の位置を合わせるためのガニ股ポーズを維持しながら、中出し目的の抜き差しを繰り返す。

「ふうっ、ふうっ、自分よりも小さい女を筋肉で包んで犯すのはやはり最高だ。相手が因縁の女というのが、またいい。カラダの具合もなかなかだしな。こんな女の体内に、オレの牡エキスを撃ち込めるだなんて、考えただけでも射精しそうだ」

オークの指が抜き差しを始める。指の第一関節まで抜いては、また指の股をぶつける。ゆっくりだが力強く繰り返し返す。

「既にヌレヌレ。快楽ほしがり状態のスケベエルフに、前戯は不要。しょっぱなから指でパコッて、淫乱エルフマンコの本性を、たあっぷり見せてもらおうか」

指を引いては中の愛液を溢れさせ、指の股をぶつけては熟れた肉花卉を揺すぶって、ラブリュースを盛大にしぶかせる。

「あつ、ああつ、いいですわ……あん、ブヒー様の指おペニス、わたくしの中をかき回してますのお」

エルフの細いウエストがくねる。柔尻は幾重にも波打って、肉の波紋が広がる、たぶたぶという音が静かに響く。

（くうっ……こいつ、なんて器用なの？ わたしを責めながら、同時にクリスタルも責めるだなんて……！）

敵に愛撫される仲間が喜びを露わにする一方、コハクは真つ赤な顔をし、口を引き結んでいた。オークはエルフを責めているが、コハクから指を抜いていない。奥までしつかりはめ込んで、媚肉と馴染ませている。

しかも、入っていない指の先で、陰唇を絶妙に撫でてくる。反対の手を激しく動かして

いるのは嘘のような、触れるか触れないかの繊細なタッチに肉唇は沸き、膣全体の感度が確実に上がり、発情の汁がジュンと溢れてしまう。

（油断すると恥ずかしい声が出ちゃう……演技じゃなく、本物の嬌声きょうせいが飛び出ちゃうっ）仲間への疑念で相殺されていた甘い気分が、先ほど以上に膨れている。片手で責められてよがってしまふなどという醜態を避けようと必死になっていると、オークはいやらしく笑う。彼が意識を向けているエルフの肉壺の具合に満足する仕草だった。

「まだ始めたばかりだというのに、マンコのこの反応はどうだ。指チンポから子種を搾り取ろうとするかのように、締めて絡んで奥に引っ張る。本当に淫乱なエルフマンコだわい。ほれ、ここはどうだ？ お前のことだ。ここもいいのだろう？」

オークの指が鈎状に曲がる。指先でおいでおいでする仕草で、膣の入り口から数センチ進んだところで、お腹側のザラザラした部分を優しく擦る。

「はあああああああ~~~~~！」

エルフは盛大に仰け反った。背中を弓の形に引き絞り、大口を開けて天井を向く。

「快感が……お腹にまで響く重厚な快楽が、わたくしのカラダを貫きましたわア」

魔物の方は見えていないが、高めでうっとりした声で告げる様子は、オークに報告したとしか思えない。

「やはり、G スポットは開発済みか。オンナだからといって必ずある泣き所ではないというのに、それをちゃんと自分のために育てていたのだな。たくさんの男に、ここを鍛えてもらったのか、ん？」

G スポットを責め立てる。弱く強く、早く遅く。エルフの反応を見ながら続行。

「あああッ！ ……ああん……はああッ……ああ……ンンンッ！ ……ああ、ブヒー様」
仰け反っては、元の直立体勢に戻り、口を引き結んで快楽に耐える顔になる。大きめに口を開けながら、はあはあと熱く息を乱す。

「なるほど。そういう具合か」

適当に時間をおいて責め方を変えつつ、性欲を刺激される彼女の百面相を探る目つきで見っていたオークが、得心したように呟く。

「ブヒー様、もつとくださいまし……わたくしの淫乱オマンコにお情けを……」

法悦の涙と哀願の涙を混ぜながら、切なそうに腰を震えさせる。

「じれったいか。そうだろう。わしは、そのようにしているのだ」

力を抜き、触れるか触れないかのタッチで、リズムカルにG スポットを擦りながら、オークが告げる。

「少し待っている。コハクのG スポットもどんな具合か検査する」

「わ、わたしのGスポットを？」

コハクが緊張する。

（わたしのものも、オークの指で犯されちゃうんだ……クリスタルは乱れてるけれど、本当に上手いのかしら……わたしも、クリスタルみたいにふしだらな姿にさせられるの？）

好意などない魔物に乱れさせられるなど屈辱的だが、逃げるわけにはいかない立場。覚悟を決める。

「始めるぞコハク」

オークは傲然と言ってくる。

「はい、ブヒー様。お手間を取らせてすみません。わたしのGスポットを、どうぞお調べください」

へりくだって受け入れる。クリスタルの痴態を暴いている間も入ったままだった指が動きます。その一方、大陰唇をしつこく撫でていた二本の指は引つ込む。

「時間をかけて愛撫したからな。もう、入り口をほぐす必要はない。Gスポットへの刺激に素直に反応できる位、ナカも高ぶっているはずだ……ん、このザラザラだな。ここがコハクのGスポットだ」

オークの指が鉤状に曲がる。

（あつさり探し当てられちゃった……来るわ……クリスタルを、あんなにしたオークの技が……）

指先を抜くというよりも、力を入れた手首ごと肘を引くという具合に、指全体が抜けていく。

「……っ」

性感が走り、口元を引き結ぶコハク。

（なに、今の……腰の内側がゾクゾクして、うなじに鳥肌が立ったわ）

オークの指が戻ってきた。指の腹を当てる程度の軽いタッチで擦った後、また出て行く。
「うっ……」

新しく走った性感に、またもや腰が震えた。太ももすらも揺れてしまう。

「しっかりほぐれているな。少々しただけだというのに、いい反応をするではないか。ほれ、ほれ、これがいいんだな？」

同じ力加減、同じリズムで、何度も何度も繰り返す。

「ああっ……はあああっ……ああ……はあっ……はあっ……」

赤い顔に快感の汗が浮く。コハクは口を開きつばなしであえぎ始める。

（やだ……こいつ、Gスポットを刺激するのも上手いわ……クリスタルは、きっと本気で

感じていたのよ……)

認めざるを得ない手管だった。巧みに刺激されている間、膣の体温が上がっていく。大陰唇への愛撫で下ごしらえをされていた肉壺は、どんどん愛液を吐き出して、指愛撫の滑りをよくする。

「ふむ。Gスポット自体は開発されていないようだが、カラダはそれなりのようだな。性感に順応する能力が思ったより高い。要するに、感じやすいわけだが……これはなかなか興味深い。セックスなど無縁そうな女武芸者の意外な痴情を感じるぞい」

エルフの好みを探り当てたときみたいに刺激の質を変え、コハクの反応を観察しながら、ゆっくり彼女を追い込んでいく。

「うああっ……ああっ……はああああっ」

「おいコハク。感じるのに忙しいのはわかるが、されるがままでは無礼だぞ。ご主人様に言うことがあるだろう。わしのメイドとしての礼儀作法を忘れるな」

冷たく言って、Gスポットを押し込んだ。

「うっ、ああっ……ああああアア~~~~~!!」

先ほどのエルフみたいに、コハクの背中がしなる。全体的にしっとり汗ばみ、淫靡なツヤを帯びた黒髪が舞う。

「ほれ、ほれ、早く言え」

押し込んで力を抜き、力を抜いては押し込むのを繰り返す。

「うあああつ……あつ、うつ、う、うあ……あああああ~~~~~!」

指に圧迫快感を与えられる度に、仰け反った背中をさらにしならせ、コハクは盛大に叫ぶ。

（お腹に響く濃密な性感が頭を突き抜けていく……氣力がごっそり削られてる感じだわ……そのせいで、性的に圧倒してくるこいつに、本能的に弱くなってる……こいつの言うことを聞かなきゃいけない気になってきてる……早く言わないと、心がおかしくなっちゃう）
なくなりかけの思考力を総動員して、礼儀の言葉を口にする。

「ぶ、ブヒー様……はあ……はあ……じ、Gスポットを検査して……わ、わたしのいやらしい姿を暴いてくださり……んっ……どうもありがとうございますっ……」

「うむ。その調子だコハク」

オークは鷹揚に頷く。

「そろそろイカせてやるぞ。わしにイキマンコの具合を見せてみる」

横で聞いていたエルフが、切なそうに叫ぶ。

「ブヒー様！ わたくしもイカせてくださいまし……あなた様に、淫乱エルフオマンコの

イキ方を確かめて欲しいですわっ」

「必死だな、クリスタル。コハクの相手をしている間も指を入れて刺激していたとはいえ、今のお前には焦れた快感でしかなかったから、当然か。もちろん、よいぞ。お前たちふたりを同時にイカせる。仲のいい友達同士、わしの指でナカイキするがいい」

「ありがとうございます、ブヒー様！ 大好きなコハクと一緒にイカせてもらえるなんて、嬉しいですわ！」

「わ、わたしも感謝しますブヒー様……はあ……はあ……クリスタルと一緒にナカイキさせてください……ふたりのイキマンコを、検査してくださいっ」

早く済ませたくて、エルフのように媚びたおねだり。

「任せておけ。お前らのマンコはだいぶ理解している。同時にイカせるなどたやすいこと。ふたり同時に、Gスポットでイカせてやる」

オークは仕上げとばかりに両手を動かす。

「どうだクリスタル。お前のような女には、これも堪らないだろ。百戦錬磨のわしにかかれば、こんなこともわかるのだ」

エルフの方は、大好きな圧迫刺激に加え、振動刺激も食らわせる。Gスポットに指の腹をしつかり当てて、押し込みながらバイブレーション。指先をどんなに振動させても、絶

対にGスポットからずれない巧みな手管で追い込んでいく。

「ああつ、ブヒー様、あああ、ブヒー様あ！」

仰け反って天井を向きながら、従属心たつぷりに叫ぶ。抱きしめる風に指を強くくわえ込んでいる秘唇はブルブル震え、熱いラブリュースをだらだら吐いていた。オークの太った指は、すっかり愛液塗れである。

「Gスポット初心者のコハクはこれだ。やさしく、小刻みに擦ってやる。どうだ、気持ちいいか？」

意地悪く訊ねつつ、Gスポットに置いた指先で素早く何度も引っかけ回す。

「あああああつっ！ ……ブヒー様っ ……ありがとうございますッ」

先輩エルフのように仰け反るコハク。やむを得なく言う媚びたお礼は偽りだが、全身を震えさせる性感は本物。お腹の奥まで響く快楽は、全身に広がっていた。意識は消えかけている。だが、不快ではない。むしろ、この上ないエクスタシー。

（任務のために仕方なく責められているのに、こんなに感じるだなんて ……わたしこれから、ほんとに魔物にイカされちゃう ……指だけで、サイターのオークにイカされる！）

腰がビクビク跳ねる中、認める。

（イクのは …… オーガズムは、クリスタルとの訓練で経験済みだけれど …… それよりも、

もつとすごいのを経験させられそうだわ……こんな奴に体験させられるなんておぞましいけれど、間違いなく、体験させられちゃうっ)

心で拒んでも、カラダの昂りは止まらない。意志を離れて絶頂を求める肉体は、ほどなくオークに屈服した。

「これで完了だ」

静かだが興奮した声で魔物が言った瞬間、少し強めに擦られた。先輩エルフもとどめの刺激を食らわされたらしい。ふたりの女スパイは、標的のオークに逆にカラダを探られた末に、女のナマの顔を暴かれる。

「ああ、イクツ、ブヒー様の指おペニスで、クリスタルのGスポットイク！」

「オマンコ検査ありがとうございますご主人様っ、コハクも一緒にGスポットでイクます！」

富豪オークのメイドらしい礼儀正しきで、ふたり仲よく絶頂。律儀にスカートとエプロンを上げたまま。またもや仰け反る。力が抜けているからこそ、楽な姿勢——少し脚を開いたガニ股に、自然になっていた。

ビュツ……ビュウウウツ……。

指をくわえ込んでいる股間を突き出し、指と大陰唇の境目から、熱蜜を水鉄砲みたいに

噴出させる。

「はあ……はあ……ああん……ブヒー様の指マン、素敵ですわあ……」

「はあっ……はあっ……ううっ……こんなに一方的にイカされちゃうなんて……」

エルフはあからさまに蕩けた顔をし、反骨心があるのにカラダを屈服させられたコハクは悔しそうな目つきになった。しかし、上気した顔で大口を開け、息を荒らげているのはふたりとも同じである。

ビクビクッ……ビクビクビクビクビクッ……！

そんな大同小異の姿で絶頂痙攣^{けいれん}。同じ魔物に同時に果てさせられたふたりは、女スパイではなく、オーガズムに打ち震えるただの女に墮とされて、仲よく全身を震えさせる。

（ふたりとも指だけで……しかも同時にイカされちゃった……）

ほどなく、コハクが呆然と思う。隣を見ると、クリスタルもそうなのだと思い知らされた。彼女はトロンとした目をし、ハアハアと犬みたいに息を荒らげている。普段の上品な目つきの面影はない。なにもかも暴かれ、性欲の充足に悦ぶ女としか思えない有り様だ。

（とても演技とは思えないわ……）

左手の薬指に目が行く。

（本当に夫がいるとしたら……夫以外の異性と……しかも、こんなサイテーなオークとの

性行為を悦んでいることになる……本物の淫乱じゃないの)

オーガズムの瞬間が去っても、甘い余韻はなかなか抜けない中、ぼんやり思う。

「ぶひひ。ふたり一緒にナカイキさせてやったぞ。実に爽快だわい」

オークがすつくと立ち上がり、顔全体で下卑た笑みを浮かべる。

「普段は秘めている女の大事な部分に踏み込んで、日常では絶対にしない性欲まみれの蕩け顔を暴く。これは誰にやっても、また何度やっても面白い」

自分の指だけで絶頂させた、ふたりのメイド志望の痴態をまじまじと鑑賞する。

「こんな楽しみも、わしが築いたカネと権力の力があつたればこそ。もしもカネも権力もない惨めな貧乏人だったら、このふたりがわしの前に現れることも、ここまで無防備にカラダを明け渡すこともなかった。そう考えると、さらに楽しいわい」

腰を左右に振って、そそり立つ肉棒を見せつけるように揺らす。

「お前らのマンコのナカイキぶりは、よかったぞ。指チンポを締めて、絡んで、引っ張って……抜き差ししているときよりも格段に甘美に行った。これはどうやら、チンポを使った調査をする必要があるな」

「ブヒー様っ」

呼吸を整えたエルフの顔がぱつと輝く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>